

第33回農業環境シンポジウム 「農業からみた生物多様性、生物多様性からみた農業」



農業は、生物多様性が生み出す生態系サービスを活用することにより成り立ち、農業環境に特有な生物相は、毎年繰り返される農業活動との深い結びつきのもとで育まれています。農業と生物多様性は、このように互いに正の影響を及ぼし合うと同時に、過度の化学資材の使用や病虫害の発生等を通して負の影響を及ぼし合う関係でもあります。持続的な農業の発展と生物多様性の保全を両立させるためには、このような両者の関係を踏まえた上で農業生産における生物多様性の利用と保全の調和を図ることが必要です。そこで農業と生物多様性に関するこれまでの研究成果を紹介し、問題解決に向けた方向性を議論するため、第33回農業環境シンポジウム「農業からみた生物多様性、生物多様性からみた農業」を農林水産省の後援を得て開催しました。

9月4日（土）、ベルサール飯田橋（東京都千代田区）で開催した本シンポジウムには、民間企業等からの50名を含めて、行政、研究機関、大学、一般など合計236名の方々にご参加いただきました。

佐藤理事長および農林水産技術会議事務局の橋本研究開発官によるご挨拶と主催者からの本シンポジウムの趣旨説明の後、あん・まくどなると氏（国連大学高等研究所）による基調講演が行われました。まくど

なると氏はご自身の長年にわたる農村での体験を通して、生物多様性に配慮した農業を実現するためには、単に生物を守るという視点だけではなく、人と人のつながりや長期的な見通しに基づいた取り組みなど、農業生産を含めた全体的なシステム構築の必要性について述べられました。

その後、生物多様性研究領域の3名が講演を行いました。山本上席研究員は、水田、あぜ、ため池、里山等からなる複合生態系と生物多様性保全の関係について、田中上席研究員は、農業生産における生物多様性の機能の活用について、藤井上席研究員は、農業における新たな生物資源の利用とリスク管理について、それぞれこれまでの研究成果を具体例をまじえて紹介しました。農林水産省環境バイオマス課の木内岳志氏からは、生物多様性をより重視した農林水産施策の取り組みの現状と推進方向についてご説明いただき、最後に法政大学の西尾健教授からは、イギリスの先進的な農業環境政策の紹介と日本における今後の農業環境施策に向けた提言をいただきました。

総合討論では会場から様々な意見や要望が出され、生物多様性に対する関心の高さを感じるとともに、今後の研究の展開に向けた多くの示唆をいただきました。

（生物多様性研究領域長 安田 耕司）



全講演者による総合討論の様子